

島根大学教育学部附属学校園 幼小中一貫教育について

1 本学校園の一貫教育グランドデザイン

(1) 一貫教育の理念とめざす子ども像

本学校園の一貫教育は、平成20年度に本格実施され、今年度で4年目を迎える。この一貫教育は、「幼稚園・小学校・中学校の共同による一貫した教育によって、次代を創造していく優れた人材を育成する」ことを基本理念としている。すなわち、幼・小・中の共同による11年間を見通した一貫教育により、自ら考え行動していくことのできる自立した個人として、心豊かにたくましく生き抜いていく力を身につけた幼児・児童・生徒の育成をねらいとしている。

また、平成18年度には、「一貫教育によりどのような子どもを育てていきたいか」を熟議し、次の通り、共通しためざす子ども像を策定して、教職員の意識を一つにした教育を推進しているところである。

基本理念

幼稚園・小学校・中学校の共同による一貫した教育によって、次代を創造していく優れた人材を育成する。

めざす子ども像

- 新しい時代を切り拓き、社会に貢献しようとする子ども
確かな知識を基盤とした優れた判断力・行動力を持ち、協働して豊かな社会の実現に果敢に挑戦しようとする。
- 豊かな感性を育み、創造的に探究し続ける子ども
人や事象の持つさまざまな価値や本質をイメージ豊かにとらえ、知的好奇心を持って学び、探究し続けていこうとする。
- 人とのかかわりを大切にし、共に伸びていく子ども
自他のよさと可能性を尊重し、支え励まし合いながら、よりよい人間関係と自己の伸長を図っていこうとする。

(2) 4・3・4教育研究ブロック

幼稚園年少（4歳）から中学3年生（15歳）までの11年間を一体的にとらえると共に、子どもの成長に応じたニーズに適應するために、既存の幼小中の枠組みを生かしつつ、教育研究ブロック（4・3・4制度）を採用している。

以下に、各教育研究ブロックの区分けとブロックごとの方針を示す。

■初等部前期ブロック■ 幼稚園年少（4歳児）～小学2年生

- 基本的な生活・学習習慣の定着を図るとともに、体験を重視した活動を通して、自ら探究していく基礎を培う。
- 集団的な活動や豊かな体験を通して、学校生活に適應する力を育む。

■初等部後期ブロック■ 小学3年生～小学5年生

- 問題解決的な学習などを通して、基礎的・基本的な学習内容の確実な定着を図る。
- 人とのかかわりを通して、相手を思いやり自らを高めようとするよりよい人間関係を醸成する。

■中等部ブロック■ 小学6年生～中学3年生

- 主体性を基盤とした深化・発展的な学習を通して、応用する力や活用する力を培う。
- 将来に向けた視野の拡充を図ることによって、よりよく生きようとする意欲と態度を伸長する。

(3) 取り組みの実際

一貫教育の推進に関しては、幼小中が同一敷地内に併設されているといった施設隣接型の環境を生かして、「教職員の協働体制」「子どもの絆づくり」、そして生徒支援的な面から「子ども支援の推進」の3本を柱として取り組んでいる。

①教職員の協働体制の取り組み

一貫教育をつくる教職員の意識や資質能力を高めるための取り組みとして、幼小中に共通した分掌を置き、共通理解のもとに指導を行っている。また、全教職員が参加する合同職員会議を定期的に行っている。そのほかにも、以下のような取り組みを行っている。

○乗り入れ授業

学力向上の観点から、教科の専門知識がより深い中学校の教員が小学校の授業を担当することにより、子どもたちの学習への興味・関心をより喚起し、子どもたちの学びをより充実させていくことをねらっている。

方法	小学6年生の授業を中学校教員が行う。 ※小学校、中学校の人事配置を考慮して、可能な教科で行う。
今年度の体制	常時 ○音楽 … 中学校教員1名が小学6年生の授業を行う。 ○家庭科 … 中学校教員1名が小学6年生の授業を行う。
	時期活動 ○外国語活動 … 小学6年生の外国語活動のなかで、年間2単元について、中学校外国語教員が小学校教員と一緒に指導する。

○教職員体験交流

異校種のくらしを観察・体験することを通して、各発達段階における子どもの実態を実感すると共に、各学校園の取り組み・文化への理解を深め、幼小中一貫教育のさらなる推進を図ることをねらいとしている。以下の2通りの体験交流を行っている。

■体験交流①：一貫教育体制を理解する基盤の確立

本学校園に新しく赴任した教職員が、赴任後2年の間に、所属学校園以外の学校園に1年に一度出向き、1日体験交流を行う。

■体験交流②：一貫教育体制を生かした教育活動の創造

教科の系統性や教育研究ブロックの意義、特に接続期の配慮を手厚くするために、幼稚園教員は小学1年生へ、小学校教員は幼稚園年長組へ、中学校教員は小学6年生へ出向き、専門性を生かした乗り入れ保育・授業を行う。

②子どもの絆づくり

施設隣接型の環境を生かし、子ども同士の交流を軸にした幼小接続期の取り組み、中学校行事への参加を主軸とした小中接続期の取り組み、幼小中全体のつながりを意識した附属学校園合同集会を行っている。それぞれの活動において、人間関係力の育成、自己の生き方を追求する力の育成等、ねらいを明確にした取り組みを行っている。

○幼小接続における絆づくり

幼稚園、小学校低学年の子どもたちが交流することにより、様々な場面における人とのふれあいを豊かに経験し、コミュニケーション能力を育成することをねらいとする。

	交流活動 わいわいランド	交流活動 わくわくタイム
対象	年長（5歳児）と小学1年生が、遊びを通して交流する。	年少（4歳児）から小学2年生が、遊びを通して自由に交流する。 希望者による活動。
活動	○年間6回程度 ○約1時間 ○幼稚園園庭，小学校中庭・南庭	○月1回程度 ○20分休憩の時間 ○幼稚園園庭

○小中接続における絆づくり

小学6年生が中学校の行事に参加し、小学校行事との違いに気づいたり、中学生の様子にふれたりすることにより、これから自分が歩むであろう中学校生活について知り、先を見据えた願いや目標がもてるようにすることをねらいとしている。

音楽会	小学6年生が中学校の音楽会に参加する。中学生の歌声を聴くと共に、音楽会の企画や運営にもふれ、中学校進学に向けた意識・意欲を高める。
-----	---

○合同集会による絆づくり

附属学校園の子どもたちが一堂に会し、一人ひとりが本学校園の一員であることを自覚し、仲間意識を醸成することをねらいとしている。

③子ども支援の推進

○特別支援教育の取り組み

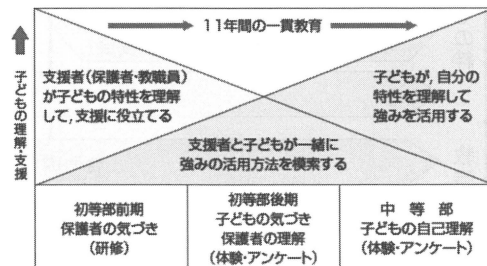
附属学校園に通うすべての子どもに対して、一人ひとりの教育的ニーズに応じた支援を充実させることを目的とする。また、一貫教育の中で、「子どもたちが、自分の認知特性や学習・生活スタイルを自己理解し、自分の強みを活用しながら、学び・生活していく姿」が醸成されることをねらいとしている。

子ども支援コーディネーターを中心に、子どもへの学習・生活相談や保護者との教育相談等を行い共通意識・理解のもと支援を進めている。

一貫教育の中で、育てていきたいこと

	発達段階に応じた認知特性、学習・生活スタイルの理解
初等部前期 幼:4歳～小:2年	誰に（自分）も得意なことと苦手なことがあることを知ることができるようにする。苦手なことがあっても大丈夫という安心感を持つ。支援者（保護者・教師）が、子どもの特性を理解し支援する。
初等部後期 小:3年～小:5年	自分の得意・不得意をある程度理解する。学習や生活に、自分の得意なことを活用しようとする力を育てる。支援者と一緒に自分に合った方法を活用していく。
中等部 小:6年～中:3年	自分にあった学習・生活スタイルや認知特性の強みと弱みを理解して、強みを活用できるようにする力を育てる。支援者に相談しながら、自分でできることを増やしていく。

支援者（保護者・教職員）と共に歩む11年



○ホップ・ステップ・ジャンプファイルの取り組み

本学校園が取り組む生活目標に基づいて、子どもが自分自身の成長について定期的に振り返る機会をもつことによって、自己をとらえる力を養うと共に、自分の成長の足跡を見つめ自己肯定感を高めることをねらいとする。

年間の生活目標、「あいさつ」・「通学マナー」・「そうじ」・「言葉づかい」・「学習態度」の5つの観点で目標に対する自己評価を行い、自分の行動の改善方法について考えさせることを継続して行っている。

基本理念

幼稚園・小学校・中学校の共同による一貫した教育によって、次代を創造していく優れた人材を育成する

育てたい子どもの姿

- 新しい時代を切り拓き、社会に貢献しようとする子ども
- 豊かな感性を育み、創造的に探求し続ける子ども
- 人とのかかわりを大切に、共に伸びていく子ども

研究主題

豊かな「社会生活」を創造する幼小中一貫教育の追求
豊かな「学び」をつくる子どもの育成



2 一貫教育による子どもの変容

平成20年度に、本学校園の子どもたちの実態を把握するために、実態調査を行った。今年度は、3年を経過した現在の子どもたちがどのように変容をしているのかをつかみ、取り組みの検証を行うために再度実態調査を行った。

(1) 調査の目的

幼小中一貫教育を進めていくうえで、11年間の見通しの中で研究の方向性を確かめ子どもの成長を確認していくことは重要であると考え、研究の成果を客観的に数値化し評価を行うことを目的とする。

(2) 調査方法

①調査内容

調査項目は、平成20年度と同様「追求して学ぶ姿」、「集団の一員としての姿」、「自他を大切にする姿」という3本柱から構成した。

調査項目 (全14項目)		
■ 追求して学ぶ姿	■ 集団の一員としての姿	■ 自他を大切にする姿
1 好奇心・意欲	9 受容力	13 承認感
2 話し合っ て考える	10 あいさ つ	14 自己肯定 感
3 論理的思 考	11 思いや り	
4 興味・関 心	12 共創の喜 び	
5 追求力		
6 暮らしに いかす		
7 家庭での 継続学習		
8 傾聴の姿 勢		

②調査方法 質問紙調査 4件法(肯定値: 4点)

- 幼稚園 …… 教師による見取り法
- 小・中学校 … 児童生徒による自己記入法

③分析方法 各項目の平均値を算出して得点とし、平成20年度との比較により分析した。

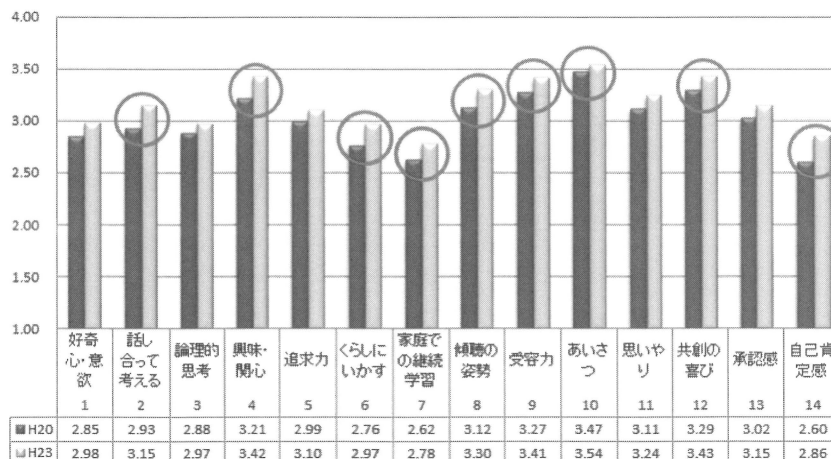
(3) 結果及び分析

①全体の傾向と変化

全体を概観すると、平成20年度(以下、H20と表記)、平成23年度(以下、H23と表記)とも同様の傾向を示している。H23では、すべての項目においてポイント値が上昇しており、向上の傾向にある。

H20にポイント値が低く懸念されていた項目6, 7, 14に着目すると、ポイント値が上昇している。これらの項目は全国的には下がる傾向にある内容であるが、伸びが見られてきたのは、取り組みの成果の現れといえるだろう。つまり、学習したことを普段のくらしと結びつけて考える姿勢や学校だけでなく家庭でも継続して学ぼうとする姿が充実してきたこと、自分のよさ

H20 H23 比較



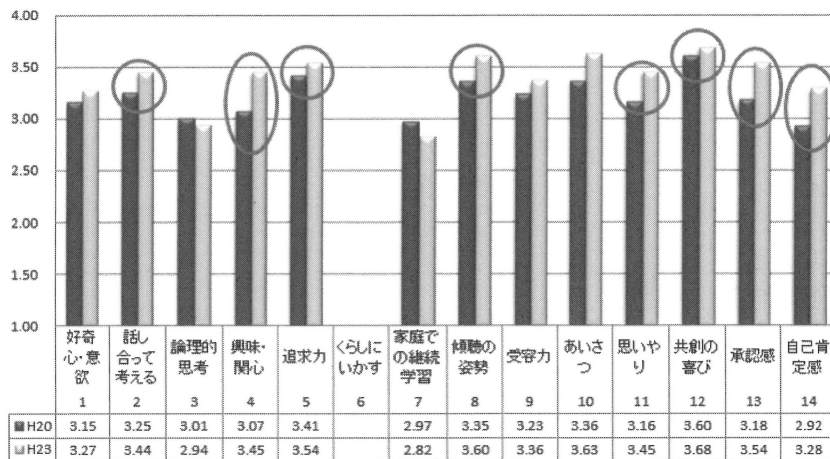
を感じている子どもが増えてきたと捉えられる。

一方、得点の上昇及び高得点を見た項目に、項目2, 4がある。もともと高ポイントであった項目であるが、学習に興味関心を持ち、話し合いにより自分の考えを深める態度が多く見られるようになっており、これまでの「授業構想」・「学び合い」を重視した授業実践の効果が現れている。さらに、項目8, 9, 10, 12に着目すると、人間関係性が一段とよくなってきていることも分かる。特に項目10のあいさつの高得点は児童生徒会の定期的な「あいさつ運動」が大きな要因だと考えられる。

②教育研究ブロックごとの傾向

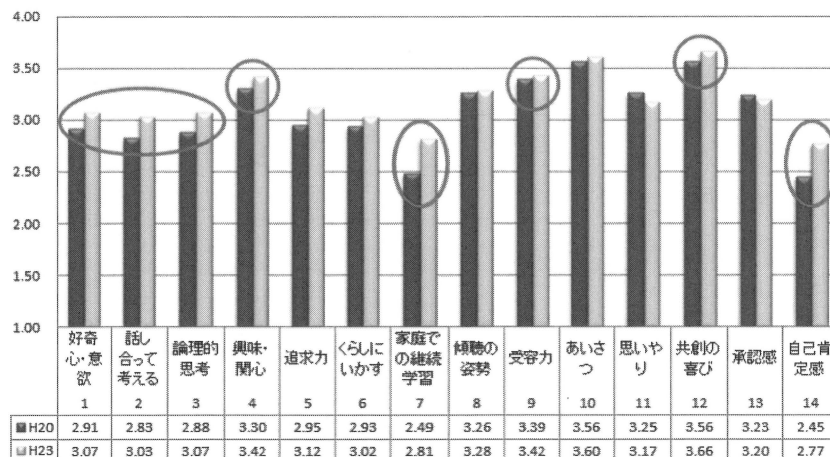
初等部前期では、全体的にポイント値が高い。先の全体傾向に照らし合わせて顕著であるのが、項目4, 11, 13, 14の伸び、項目2, 5, 8, 12の高得点である。興味関心をもって他者と共に追求する姿勢、傾聴や共創、思いやり、承認感といった集団の一員としての成長が見て取れる。それが自己肯定感の伸びとして現れていると考えられる。

初等部前期 H20・H23 比較



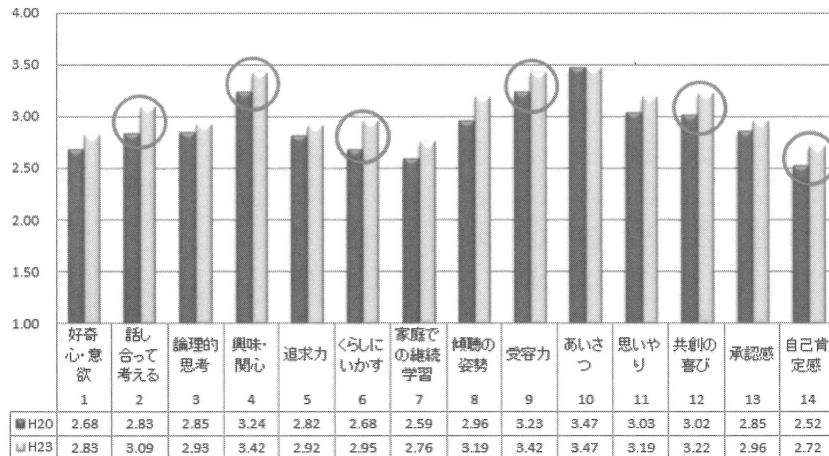
初等部後期では、項目1, 2, 3が一律に伸びている。また、項目4, 9, 12が高い得点を示している。これらの項目は「学び合い」や「学び方」に関わる内容であり、疑問を持ち自分なりに調べ他者との学び合いをする中で、根拠をもって考えるといった学び方が身についてきていると考えられる。すなわち、初等部後期では、「学び合い」や「学び方」を形成していく上で大変重要なブロックであることを示しているといえよう。また、項目7は、自主学習の習慣が定着してきたことを示しており、項目14からは、自分のよさを感じている子どもが増えてきたことがうかがえる。

初等部後期 H20・H23 比較



中等部では、項目 2, 4, 6, 9, 12, 14の伸びが顕著である。高い興味関心をもち、「学び合い」のある学習を通して、学んだことを「くらしにいかす力」を伸ばしていることが分かる。発達段階的に学習意欲が下がる傾向にあるブロックにあって、高い得点を示していることは強みといえるだろう。一方、受容力や共創の喜び等、他者と良好な関係を育む中で協同的探求ができるようになり、さらに「自己肯定感」を伸ばしてきていると捉えることができそうである。

中等部 H20・H23 比較

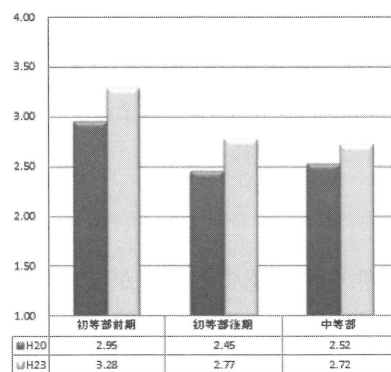


③項目別変化

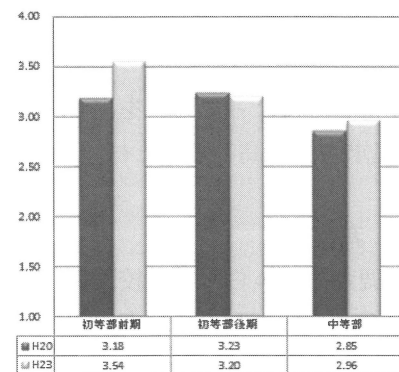
変容の詳細を見出すために、項目ごとの変化を調べた。調査が3年を経過しており、学年ごとの変化をみるには妥当性、信頼性が低いと考えた。そこで、教育研究ブロック（初等部前期、初等部後期、中等部）ごとに変化をみることにした。

H20に低ポイントであった項目14と関連性が強いと思われる項目13に着目すると、自己肯定感と承認感が共に上昇傾向にあることがわかる。しかし、学年が上がるにつれて、次第にポイントが下がってきており、発達段階を鑑みると下がる傾向にある内容ではあるが、わずかながらでも向上させていくことが求められているといえよう。

調査項目14 自己肯定感



調査項目13 承認感



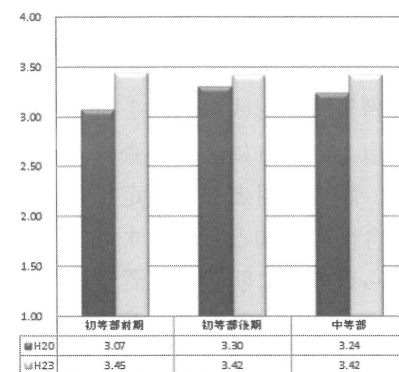
次に、項目4に着目してみる。H20にも高い得点を見せていた項目である。全グループにおいて伸びをみせており、3.5ポイント近くの高得点を示した。

興味関心は一般的に、学年が上がるにつれて下がっていく例が示されていることが多い。本学校園においては、中等部でも高い得点を示していることは特筆すべきところである。

これは、全ブロックを通して、幼児・児童・生徒の実態に応じた教育が進められていることを表しており、大きな強みといえる。

項目6は、H20に低い得点を示し、懸念されていた学んだことを「くらしにいかす力」に関する項目である。初等部後期と中等部を

調査項目4 興味関心



比較すると、H20には、低下する傾向にあったものの、H23では、向上していると共に、中等部での伸びが顕著である。これは、児童・生徒が学校で学習したことをその場だけに止めることなく、普段の生活や他の学習場面において、関連づけたり、使ったりするようになったことを意味する。今後も、「くらしにいかす」ことができる授業の創造が求められる。

項目2は、「学び合い」の力を計る項目である。

H23では、すべてのブロックにおいて得点の上昇がみられた。初等部前期においては3.5ポイント近くの高得点を示すものの、初等部後期と中等部においては、0.5ポイント近く下降する。これは、学習内容の高度化に伴って、話し合いをした後に自分の考えを見直し再構築する困難が生じることが原因の一つとして予想される。このことを踏まえたとしても、初等部後期から中等部にかけて、「学び合い」のある学習が継続されてきていることが示されたといえよう。

項目5は、「わからないことをそのままにせず、分かるまで努力する」という内容である。H23にすべてのブロックにおいて上昇しており、納得するまで追求しようとする姿勢が育ってきていることがうかがえる。学年が上がるにつれて下降する傾向にはあるが、少しずつでも向上させていきたい項目である。下項の原因としては、項目2同様、学習内容の高度化に伴って、分かるまで追求することの困難が生じていると予想できる。

項目2と項目5の結果を照らし合わせてみると、「学び合い」のある授業が「追求力」の向上に関係していると捉えることができそうである。子どもが個々では解決にたどり着けないとしても、「学び合い」によって考えを出し合ったり、教え合ったりすることが、「追求力」を高めることにつながっていると考えられる。

(4) 考察

調査結果から、本学校園の子どもの実態を再確認することができた。それと共に、指導者の意識や指導のあり方によって向上する項目があることが分かり、指導の重点も見えてきた。

特に、「追求して学ぶ姿」としては、話し合いの中で自分の考えをもつといった「学び合い」の重要性が明らかとなった。そして、この「学び合い」が「追求力」を刺激し、「くらしにいかす」「家庭での継続学習」に広がりを見せ、子どもが自分なりの学び方を獲得してきていることが推察できる。

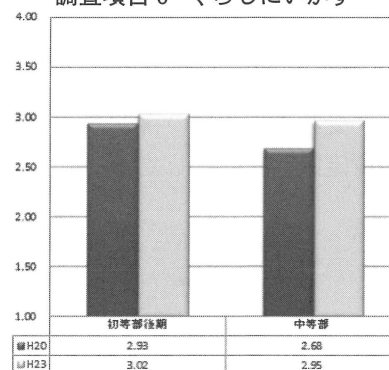
一方、「集団の一員としての姿」及び「自他を大切に作る姿」では、「傾聴の姿勢」・「受容力」・「思いやり」・「承認感」といった人間関係や道徳性に関する内容の伸びがみられた。これに伴って、「共創の喜び」「自己肯定感」も向上してきており、学級の支持的風土や課題を協同解決する姿勢など、学習集団の形成の一翼を担っていると考えられる。

以上のように、本調査により、子どもの実態とその変容をある程度明らかにすることができた。そして、調査項目として設定した内容がまさに本学園が育てたい具体的な力であることを再認識した。

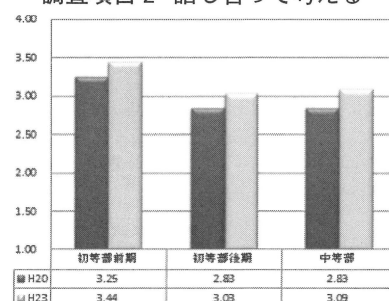
今後の課題として、すべての教育活動や研究推進において、これらの力を育てたい資質や能力としてねらいの中に明確に位置づけ、常に意識した指導を行うことが必要である。さらに、育てたい力を教師だけが意識するのではなく、子ども自身が意識して取り組み、自己で振り返り成長していけるようにしていくことも大切であると考えられる。

(文責 伊藤 英俊)

調査項目6 くらしにいかす



調査項目2 話し合って考える



調査項目5 追求力

